

Cogniaux u. Harms<sup>1)</sup> の記載文では蠟を析出し、種子は I 型であるとしているが、その図 (p. 165, Fig. 17) はあきらかに II 型の種子をあらわしている。すなわちこの 2 型を混同しているようにみられる。

これらを考え合わせると、日本在来種は果実表面に蠟を析出し、種子は I 型であるものを云い、これが従来の *Benincasa cerifera* Savi である。これに対して果表面に蠟を析出しなくて、種子が II 型であるものには、*Benincasa cerifera* Savi forma *emarginata* K. Kimura et Sugiyama と命名した。

*Benincasa cerifera* Savi forma ***emarginata*** K. Kimura et Sugiyama form. nov.

Fructus ovato-oblongus vel cylindricus, 30–65 cm longus, ca. 20 cm crassus, non pruinosis, saturate viridis, albo vel flavo-marmoratus. Semina albida, 10–11 mm longa, 5–6 mm lata, 2 mm crassa, *emarginata*.

Hab. cultivated in Japan and China.

Cult. in Medical Garden of Kyoto College of Pharmacy in Yamashina, east of Kyoto City (Leg. H. Sugiyama No. 59092001. Dat. 20.IX, 1959), typus in University of Kyoto, ibid. (Leg. H. Sugiyama No. 59092002. Dat. 20. IX, 1959) ibid. (Leg. H. Sugiyama No. 60082301, Dat. 23. VIII, 1960, Leg. H. Sugiyama No. 60082302, Dat. 23. VIII, 1960).

本研究に際し植物の同定ならびに品種名の命名について御教示を受けた京都大学理学部植物学教室北村四郎教授および材料を寄贈された方々に深謝の意を表します。

#### SUMMARY

The authors found two different forms among the seeds of *Benincasa cerifera* Savi, collected from various markets of China and Japan.

The two forms, however, can not be separable by the shape of their developed plants. The seeds of the one form show velvetlike appearance on the surface and have an upheaved band along their margin (I-form, Fig. 1, A–D). On the other hand, those of another one show no hairy appearance on its surface having no upheaved band along the margin at all (II-form, Fig. 1, E, F).

The authors decided that the name of *Benincasa cerifera* Savi had been given to the I-form plants, and the II-form is a new form: *Benincasa cerifera* Savi forma *emarginata* K. Kimura et Sugiyama.

○ *Picea* 岩手県早池峯山に産す (石塚和雄) Kazuo ISHIZUKA: The occurrence of *Picea* on Mt. Hayachine, Iwate Prefecture

筆者は昨年 8 月 26 日、林試東北支場村井宏氏らとともに早池峯山(海拔 1914 m) 北面、石合沢(通称アイオン沢) の植生調査におもむいた際、同地の海拔 1000~1100 m の間

1) Cogniaux, A. u. Harms, H. in Engler, A: Pflanzenreich 88 Hf. (IV. 275, II: 163 ~168 (1924).

に自生する *Picea* を採集した。これの存在については、同行した山案内人百目木氏がすでに気づいていたものである。帰学後、直ちに盛岡市東北林木育種場の村井三郎氏に資料を提供する一方、9月1日～5日の間東北大谷、相馬両氏、岩手大菊地氏とともに再び現地に行って自生地を確認し、毎木調査、植生調査をおこなった。

このものはほぼ *Picea Glehnii* (アカエゾマツ) の諸特徴と一致するが、多少の変異をみると思われる点もあり、分類学者による将来の検討をまちたい。

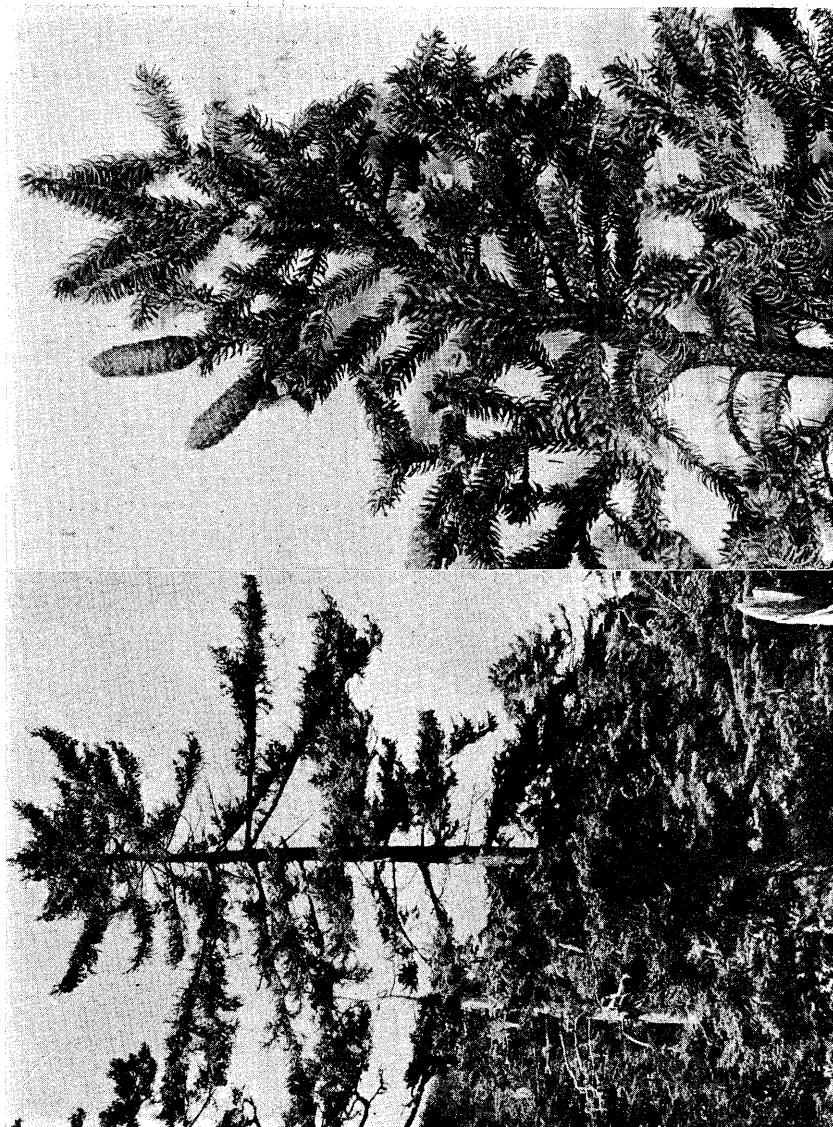
現地はアイオン台風の際の土石流による被害をまぬかれて、島状に約2haのコメツガ・キタゴヨウ林の残存した部分であり、群落型はコメツガ・キタゴヨウ——ヒノキアスナロ——蘚類型とみとめられる。林内は巨岩の重なりあった傾斜20°内外の岩石地で、土壤は岩上および上のひらいた岩間にわずかに形成されるにすぎない。*Picea* はこの森林中に点々と混生し、最大樹は樹高25m、胸高直径54cmに達する。毎木調査の結果、胸高直径5cmをこえるもの93株の自生を確認した。

東北地方における *Picea* としては、現在までに各地方からアカエゾマツその他数種の洪積世の遺体が報告されているのに反し、現生種としては最南端の福島県南部にハリモミ、トウヒ等が知られているのみである。したがって、本自生地の存在は植物学、生態学上かなりの問題をふくむものと考えられるので、とりあえず自生の事実を速報する。

なお、標本は上記村井三郎氏並びに東北大理学部にある他、東京科学博物館、北大館脇教授、大阪市大三木教授にそれぞれ寄贈してある。(岩手大学学芸学部生物学教室)



自生地全景、遠景は早池峠頂上

早池峯山の *Picea*.